

# みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

縦横無尽 タテとヨコ  
色とかたちのフィールドワーク(18):  
タテ系の張力と織機の型式8: 錘り機2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5211">http://hdl.handle.net/10502/5211</a>

# 縦横無尽

# タテとヨコのファイールドワーク

吉本 忍

## タテ糸の張力と織機の型式⑧

## 錘り機2

### 錘りをともなった高機

錘り機は、錘りを使ってタテ糸に張力を付与する型式の織機であり、英語では一般に warp-weighted loom と呼ばれている。ただし、欧米で warp-weighted loom とはいえ、

一般に先月号で紹介した、ノルウェーの北極圏に住むサーミ人のもので使用されている錘り機のように、タテ糸の一方を棒に固定し、垂れ下がったタテ糸の下端に錘りをくくりつけることによって、タテ糸に張力を付与する型式の織機として理解されてきた。しかし、錘りを使ってタテ糸に張力を付与するというタテ糸の保持方式には、そのほかに、タテ糸の一方を枠の一部を構成している棒に固定し、他方を

錘りでひっぱる方式と、タテ糸の一方を錘り、他方も錘りでひっぱる方式がある。わかりやすくいえば、これらはいずれも高機にかけわたされたタテ糸に張力を付与するために錘りが組み込まれた織機である。

今月号では、そうした錘りをともなった高機を紹介するが、それらのうちには、錘りが地面に置かれた状態で設置されているばあいと、サーミ人の錘り機と同様に錘りが空中にぶらさげた状態で設置されているばあいがある。

### インドネシアの錘り機

高機は、今日、世界の広範な地域で使用されており、さまざまな織機型式のうちでは、世界でもっとも普遍的な織機として位置づけられる。それらの高機は、タテ糸を2本のタテ糸保持棒、すなわちタテ巻き具と布巻き具、あるいは先端棒を布巻き具に固定すること

によってタテ糸に張力を付与する型式の織機である。ただし、そうした高機をタテ糸に張力を付与する方式の違いにもとづいて分類すると、その織機型式は285号で紹介しているように枠機のうちに包括される。

今日、日本の各地で使用されている高機は、そうした枠機のうちに包

図1 ミナンカバウの錘り機の構造 (「インドネシアにおける手織機の類型論的研究」より)  
a1~a2-番目綜統、b-天秤仕掛け、c1~c2-踏み木、d-先端棒、e-錘り、f-布巻き具、g-布巻き保持具、h-機台、i-筵、j-番目綜統・筵保持棒

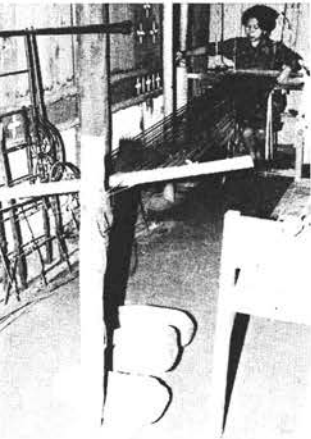
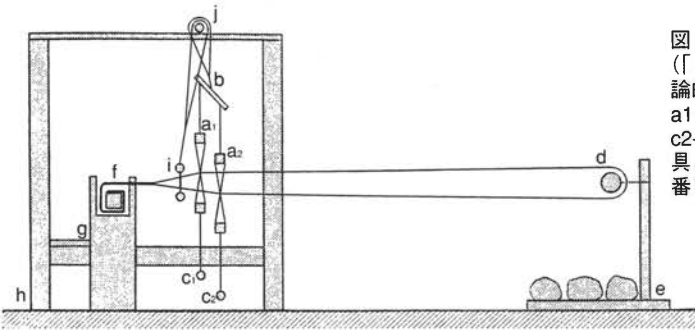


写真1 ミナンカバウ人の錘り機による機織り (インドネシア、ヤクンプ: 1988年)

括される型式の高機である。しかし、それらとは異なる錘りをともなった高機、すなわち錘り機をわたしがはじめて目にしたのは、1988年に国立民族学博物館の民族資料収集プロジェクトとして、インドネシアで染織関連資料や土器の収集をおこなったときのことと、ところはインドネシアのスマトラ島西部の西スマトラ州バヤクンプであった。

バヤクンプで収集した錘り機は、ミナンカバウ人が金糸を紋緯とした伝統的な絹の紋織物を織るために使っていた(写真1・図1)。この錘り機にそなわっている錘りは、帆柱のような支柱をともなった細長い木製の台座に、ひとかかえもある大きな石を3個載せたもので、タテ糸の先端部は中継棒を介して支柱に結ばれていた。また、この錘り機を使用した機織りでは、ある程度織り進むと、錘りの載った台座を手前に滑らせて引き寄せ、織った部分を布巻き具に巻き取ったのちに再び織り始めるという作業が繰り返される。

### 西アフリカの錘り機

インドネシアのミナンカバウ人のもので使われてきた錘り機と同様に、錘りが地面に置かれた状態で設置されている高機は、西アフリカのセネガルからカメルーンにかけて広く分布している。そうした西アフリカの錘りをともなった高機については、2000年にセネガルのソニンケ人とポラルル人、トーゴのエウエ人とコトコリ人、カメルーンのカプシキ人とナムデイ(ドゥアヨ)人のもとで調査をおこなった。これらの調査で錘りをともなった高機を使って織られていた織物は、おもに木綿を織維素材とした無地織物、縞織物、綴織物などであった。また、地面のうえに置

写真4 ポラール人の錘り機の錘り  
(セネガル、ダカール：2000年)



写真2 ナムディ人の錘り機による機織り  
(カメルーン、テテ：2000年)

かれた錘りは、一般に木製、あるいは石製の板の上に直接、石を載せたもので、板の先端部に中継棒を介してタテ糸の先端部が結ばれていた。そして、それらの錘り機による機織りでは、インドネシアのミナンカバウ人の錘り機による機織りと同様に、ある程度織り進むと錘りの載った板を手前に滑らせて引き寄せ、織った部分を布巻き具に巻き取ったのちに再び織り始めるという作業が繰り返されていた。なお、西アフリカにおける機織りでは複数の織り手が横一列に並んでおこなわれていることが多く、そうした現場で織り手の前方の広場に置かれた十数個の錘りが、徐々に織り手の側に引き寄せられていくさまは、さ

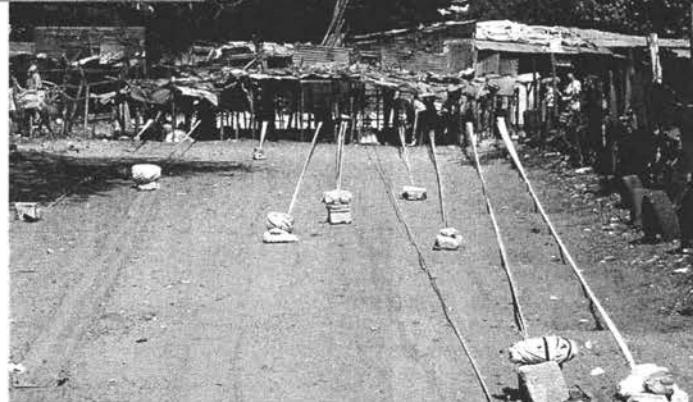


写真3 ポラール人の錘り機による機織り (セネガル、ダカール：2000年)

ながらのろまな亀たちのかけくらべといったおもむきであった(写真2~4)。

## シルクロードの錘り機

錘りが空中にぶらさがった状態で設置された高機については、1997年以来、エジプト、ヨルダン、イラン、中国の新疆ウイグル自治区、ウズベキスタン、トルコ、シリアで調査をおこなってきた。それらの調査からは、錘りが空中にぶらさがった状態で設置された高機は、シルクロードとその周縁地域において普遍的に分布している錘り機であり、それらの錘りをともなった高機は、同地域で使用されている高機の大多数を占めていることがあきらかになってきた。また、錘りが空中にぶらさがった状態で設置された高機という他の地域には見いだせない構造の錘り機は、その分布状況から、中国の漢代、もしくはそれ以前に腰機から発展的に出現した高機と、紀元前からヨーロッパで使われていたサーミと同型式の錘り機が、東西文明を結ぶ交易路として機能してきたシルクロードにおいて融合し成立した織機型式であったと考えられる。そうした仮説については、本稿の末尾の文献に記した論文「イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区の地機と杵機と高機」において提示してきた。

なお、シルクロードとその周縁地域に分布する錘り機の多くは、タテ巻き棒に錘りが取り付けられており、タテ巻き棒は錘りとともに空中にぶらさがった状態で設置されている(写真5)(図2)。ただし、錘りが空中にぶらさがった状態で設置された高機のうちには、高機の機台に組み込まれたタテ巻き棒と布巻き棒にそれぞれ錘りを巻きつけ、タテ糸の一

方を錘り、他方も錘りでひっぱることによってタテ糸に張力を付与する方式があったこともあきらかになっている。そうした高機(写真6)(図3)は1999年にウズベキスタン中部のスラタ市内にあるチャシユマ博物館でおこなった資料調査のさいに見ている。これはウズベク人が20世紀半ば頃までスラタで使っていたものであるが、その分布状況をはじめとする詳細については不明である。

## ヨーロッパの錘り機

錘りをともなった高機は、これまでに述べてきたように、インドネシアと西アフリカ、そしてシルクロードとその周縁地域での分布が確認されている。ただし、17世紀、あるいはそれ以前のヨーロッパにおいては、先月号で紹介したサーミ人のもとで使われてきたような錘り機とは別の錘り機、すなわち錘りを空中にぶら下げた状態で設置した高機が存在していた可能性をうかがわせる絵画資料(\*Vestibus Sacerdotum Hebraeorum、所収)(図4)がある。これは1680年にJohannis Brauniusがヘブライ人の宗教儀礼用衣服を生産するための織機として描いた特殊な構造の錘り機であり、この錘り機で織られている織物も、異形の織物として274号で紹介した管状織物のバリエーションともいえる袖なしの衣服という特殊な形状を呈している。このような錘り機が実在したか否かは、これまでのところまったく不明であるが、構造・機能論的には実在した織機であった可能性は否定できない。\*\*\*\*\*

## 補足・高機について

連載をはじめて以来、わたしは「高機」と





図4 “Vestibus Sacerdotum Hebraeorum”所収のJohannis Brauniusによって描かれた錘り機 (“Studies in Primitive Looms”より) a1~a2-番目綜統、b1~b4-タテ糸保持具 (b1-布巻き具)、b5~b6-錘り、c-滑車、d1~d4-踏み木、e-緯入具、f-箆



写真5 ペルシア人の錘り機による機織り (イラン、ヤズド：1998年)

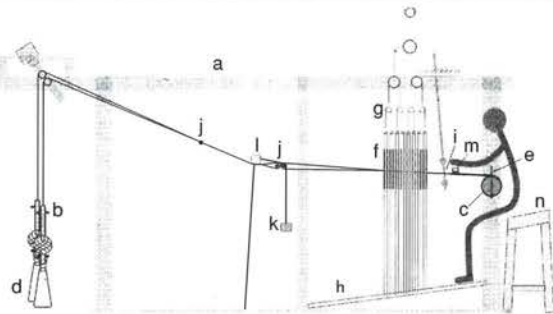


図2 ペルシア人の錘り機(写真5)の構造(「シルクロードの織機」より) a-機台、b-タテ巻き棒、c-布巻き棒、d-錘り、e-布巻き制御棒、f-番目綜統、g-滑車、h-踏み木、i-杼、j-タテ糸整列具(綾棒)、k-綾棒保持具、l-タテ糸押え棒、m-幅出し具(伸子)、n-椅子

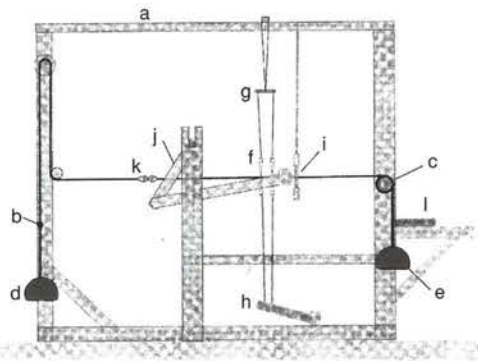


図3 ウズベク人の錘り機(写真6)の構造(「シルクロードの織機」より) a-機台、b-タテ糸保持棒、c-布巻き棒、d-錘り、e-錘り、f-番目綜統、g-天秤棒、h-踏み木、i-箆、j-緯打補助具(腕木)、k-タテ糸整列具(綾棒)、l-座板

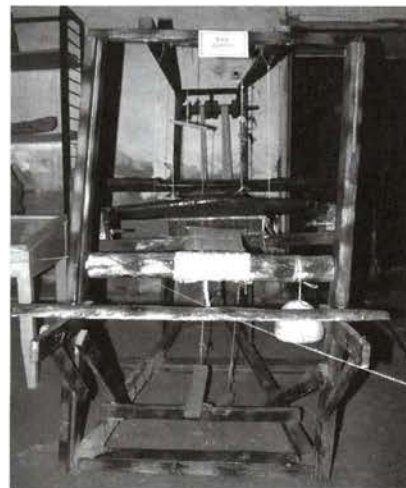


写真6 ウズベク人のもとで使われていた錘り機 (ウズベキスタン、スラタ：1999年)

という名称をしばしば記述してきたが、これまで高機についての詳しい説明はとくにしてこなかった。というのも「染織α」の読者においては、高機といえば、常識的にその織機型式は基本的に理解していただいていると考えたからである。ただし、今月号で紹介した錘り機は、具体的には錘りをともなった高機であり、わが国で使われてきた一般的な高機とはタテ糸の保持方式が異なる型式である。そうしたことから、誤解のないように、ここでは高機について若干の補足説明をしておくこととする。

高機は、英語では一般に「踏み木織機」を意味する treadle loom の名で呼ばれている。したがって、その織機構造の特徴は、足踏み式の開口補助装置をともなっていることであり、基本的に2本の踏み木を足で踏みかえることによって、踏み木につながれた綜統が上下してタテ糸の開口と逆開口が繰り返される。わたしがこれまでに使用してきた高機という織機名称は、そうした足踏み式の開口補助装置をそなえた織機のことである。

なお、高機は、今日、世界の広範な地域においてもちいられているが、それらの高機の織機型式が一樣ではないことは、本稿で紹介

した錘りをともなった高機の存在からもあきらかであり、高機のうちには多種多様な型式が認められる。このことはまた、わが国で使用されてきた高機についてもいえる。たとえば、今日、わが国で一般的に使われている高機は、開口具として基本的に2枚1組の番目綜統をそなえているが、そうした高機は明治時代以降に普及したものであり、それ以前の高機としては、2枚1組の擬似番目綜統をそなえた高機や、2枚の輪状綜統と2本の開口保持棒をそなえた高機があり、後者の高機は今も長野県や山口県の一部で使われている。なお、以上のような織機が、わが国で一般に高機と呼びならわされてきたことについては、いざり機や地機の名で呼ばれてきた織機、すなわち腰機にくらべて、織機としての丈が高く、織り手が坐る位置も高い位置に設定されていることに由来するようである。

(国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)

よしもと・しのぶ

文献  
Roth, H.L.  
1960 (1961)年 *Studies in Primitive Looms*.  
Halifax: Bankfield Museum.

吉本 忍・柳 悦州  
2002年「シルクロードの織機」、シルクロード学研究13「シルクロード織機研究」、シルクロード学研究センター。

吉本 忍  
1987年「手織異の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。  
1990年「インドネシアにおける手織り機の類型論的研究」『国立民族学博物館研究報告』15巻1号。

2002年「イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区の地機と杼機と高機」、シルクロード学研究13「シルクロード織機研究」、シルクロード学研究センター。